
星燐のヴィタ

風間ハヤテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星燐のヴィタ

【Nコード】

N2858N

【作者名】

風間ハヤテ

【あらすじ】

今度の勘違いの舞台は広大な宇宙。平凡に生きていたはずのオリ主が戦いに巻き込まれながらも必死に？ 生き抜いていくお話。オリ勘を何故かそのまま恋姫に変更してしまったSF勘違い作品！！ 真・恋姫十無双キャラが戦艦を率いて対決する。翻訳十無双マンネリ化を防ぐための出作。

第1話「天外を行く者」

人類が宇宙への夢を見てから早数千年という時が経つ。今では惑星に街を作り、多くの人が移り住んでいる。

そして人は枷がはずれたように爆発的に増えていった。宇宙は人の物、そういわんばかりに……

しかし、それは長くは続かなかつた。宇宙を侵犯し続けた人類はその後、未知なる存在と出会う。

初めて邂逅した宇宙人。人類が接触したのは三つの勢力。

一つは不可侵を求めたナダ。

一つはジラーチ、彼らは友好を願う。

そして最後の一つ、インペラートルは侵略を開始した。

それから幾年にも及ぶ戦の日々が過ぎる。

膠着状態となった地球連合とインペラートル帝国との戦争は、ある一人の男の介入によって激化していった

早朝から人で賑わう宇宙の港。その一角へと向かっている一人の青年。

大型船が停泊している所とは違う比較的小さな空間。よく渋滞が起きるため停滞領域とも言われている小型船用の出入り口。

そこへと至る途中にある船着き場にて、一つの船に乗り込んでいく男。

《おはようございます。マスター義明》

乗り込んだ瞬間に自動で扉が閉まり、明かりも灯る。誰もいない

はずの船内からは女性の声が響いてきた。

「おはよう、ラビッツ。珍しいじゃないか、朝早くに自分から起きているなんて」

《それは今までの間、こんな所に何日も放置していくマスターへの怒りを溜め込んでいました》

《あと少しでブレイクタイム突入です》

「またゲームで遊んでいたのか、AIの癖にゲーム好きとは」

《何を言いますか！ ゲームなくしてAIをしてられるかってんですよ。良いですか、私達AIにとって……》

「はいはい」

いつもの様に熱く語りだしたAIをいつもの様に無視して作業をしていく青年。彼の名前は浅倉義明。父親から受け継いだ運送業を営んでいる最中だ。

そして彼女の名前はラビッツアクション。昔、父親のサポートをしていたAIだ。

船へと接続された機械を通し、彼女はその船を操っている。言っ
てしまえば持ち運びが容易な携帯プログラムなのだ。

いつもは持ち帰る義明も、今月は珍しいほどの仕事量だったためにラビッツを持って帰る手間すら惜しんでいた。

その事で愚痴るAI、今まではそれだけじゃ怒らなかつた彼女も今日だけは特別だった。

《それに今回は辺境の中の辺境の中のまた辺境の地への輸送ですよ、収入より遥かに燃料費がかかる地域への移動など愚痴るなどという方がおかしいのです》

「まあそういうなよ、そんな辺境の地だからこそ、戦争を避けて隠れている金持ちがいるんじゃないか」

今回の輸送地点は辺境の地にある一つの星。周りには何も無い場所、戦線も遠く、戦略上まるで価値の無い地域、そのため危険な事が全くといって良いほどに無い場所。

それは海賊すらも寄りつかないといわれるほどだ、ほとんど獲物がいない場所なのだからそこに居ても意味が無いのだ。

そんな所への輸送など彼女にとってなんら面白みの無い物だった。戦場近く、またはデブリ地帯を潜り抜けての配達の方が彼女は燃えるのだ。

「それに今回は相手さん大盤振る舞いだぞ、だって往復の経費も含めて全て前払いでしかも倍にしてくれたんだから、燃料費を節約出来たらかなりの儲けになるぞ」

《……… 凄く怪しいです。危険な物なのではないですか？》

「大丈夫だ、既に中身は確認済みだ。開けた事が分からないように上手く戻しといたからバレもしない」

《……… はあ》

勝手に荷物を開けていた義明。その技術は家族がまだ生きていた頃より培われていた物だ。

一度好奇心で開けてしまった事を境に、父親の手伝いをすると言いつつ中身を確認するのが趣味になっていた義明。荷物開け閉めの経験は彼此10年以上になるベテランだった。

《まあいいです、さっさと行く事にしましょう。それに今日は驚くほど出入り口が空いています。こんな日は滅多にないです》

「それは幸先がいいな」

《簡単な仕事で儲かると、この時の彼は思っていたのだった。それがどんなに愚かな事なのかを未だ知る由も無く……》

「縁起でもない事言うなよな」

珍しく混雑していない出口を移動しながら雑談をしている二人。しかしその先に待っている事態に気付く事はなかった。

出発してから数日。途中で燃料エネルギーを予備も含め大量に補給した義明達はようやく目的地の星まで到達した。

そこでのやりとりは順調に進み。また宇宙へと上がっていった。その帰り道。

《こんな辺鄙な所では海賊達が出ても雑魚風情でしょうね。……そういえばなんで勇者が旅に出ようとす村や町近くのモンスター達は雑魚なのでしょうか？》

《ラスト辺りの街の住民の方がよほどLVが高い気がするんですけど》

《絶対そっちを使った方が早く魔王を倒せますって、そう思いませんか？》

「ノーコメントで」

《まったく、ノリが悪いですよ》

関係ない事で熱くなっているラビッツアクション。その会話と並列しながら彼女は数本のゲームを動かしていた。

運送業には必要性が全く無いほどの超高速の情報処理能力、それが名前の由来らしい。

そしてその能力の大半はゲームに費やしていたラビッツであった。

「……………あれっ？」

《どこかしましたか？》

操縦はラビッツに任せてDLした本を読んでいた義明。区切りの良い所でふと目を前に向けると、遠くの方に光がはしっていたのを

目撃した。

「あれってなんだ？」

《……………あつ！》

義明の疑問を受け、その能力の割り当てをゲームから船全般へと変えたラビッツは、レーダーに映る反応を確認してこの宙域の現状をようやく知った。

《どうやら、本当に何かが起きる前触れだったらしいですよ、あの空いていた出入り口は》

《地球連合軍とインペラートル帝国軍の艦を確認しました。目の前で起きているのは間違いなく戦闘ですね》

「……………うそお」

戦略価値のない場所。普通ならば意味の無いその宙域でも、ある事には向いていた。言うなれば新開発兵器の実験をするのには好都合だったのだ。

少数の艦のみであり、しかも最新鋭艦ではなく本当にオンボロの駆逐艦に搭載させたその新兵器。敵の目を欺いたはずの実験だったのだが、情報は敵に漏れていて、その新兵器強奪のためにこの場所へと呼び込んでしまっていたのだ。

相手も少数ではあったのだが、オンボロ艦数隻のみの状態では勝ち目などほとんどない。新兵器はあるものの搭載されているのは一隻のみ、そして相手の技術力は大幅に高く、どこまで効果が及ぶのかは推測できない物があった。

それでも逃げるといふ選択をしなかった地球の軍船。開戦後すぐに周りの船が落とされ、義明が見た光の時には残り4隻までとなっていた。

その戦闘とは別に、義明の乗る小型船が近くにいるという事を、

戦闘をしている敵軍は探知していた。

《後ろから迫ってくる反応が多数。これはインペラートルの小型無人兵器です》

「もしかして、狙われていたりする？」

《完璧狙われていますね。まあ私達のレーダー範囲に入る前に向こう側には捉えられていた事でしょう。でなければ無人機を回り込まずなんて真似はしませんよ》

迫り来る無人機達は前方に付けられた銃口による攻撃を開始する。それを回避する小型船。複数の射線、発射間隔、それらを全て計算し大量に迫る銃撃を辛うじて避けるラビッツ。彼女の能力が義明に渡ってから初めて最大限に発揮された瞬間だった。

「ラビッツ、すぐさま逃げよう！ 振り切れるか」

《それはきついですね。回避しながらの今の状況ではいつかは追い付かれてしまいます。しかし十四機もの無人機を我らに向けるとは、ふっ、燃えてきますね》

「地球側なら民間でもお構いなしか、インペラートルの連中は。ラビッツ、迎撃は出来るのか」

《無理です、前面用の砲門しか乗せていません。そして今は反転なんてしている暇がないのです》

会話をしながらも十四機もの銃撃を避けきっていたラビッツではあったが、流星に分が悪かった。

どんどん追い込まれていく小型船。そして無人機に包囲されかけた時、その進路を塞ぐように一つの小惑星が迫ってきた。

《掴まってくてください、ブンブン五月蠅い後ろの八エどもをあそこに叩きつけますよ》

「おまえ、ハエって……うわっ」

小惑星にぶつかる間にその進路を変更し、すれすれを飛行する小型船。

急な小型船の動きについていけなかった無人機は二機だけ、その二機は小惑星へとぶつかり爆発した。

他の十二機は衝突を免れていたが連携は大きく崩れていた、そしてすれすれを飛行していた小型船がまた進路を変更し、ラビッツ達は遂に攻勢へと転じた。

《言いませんでしたか？ 叩きつけるって！！》

《ハエどもには地べたがお似合いです！！》

捻りこみ数機の無人機へと向く事が出来たラビッツ。そのまま反撃を開始し、その攻撃が当たった無人機と回避しようとした動きで小惑星へとぶつかってしまった無人機とを合わせ計六機の撃墜に成功していた。

《システム30%ダウンを確認。マスター残りの敵への攻撃はお任せします。私は回避に専念します》
「分かったラビッツ。ごくろうさん」

しかし、その反動も大きかった。最大負荷を数分以上かけさせた為にラビッツの処理能力が一時ダウンし、船のシステム類もその影響を受けていた。

メンテナンスが確りと出来ていたのなら話は違っていたのだが、ピンボー輸送屋の彼には簡易なメンテしか出来なかったのだ。

それでも残り六機程度なら地球製より高性能品の無人機達相手でも、この二人ならどうとでもなる数ではあった。

「まったく、ラビッツに影響されて始めた射撃系のゲームの経験が結構役に立っているという現実、少し複雑に思うぞ」

《何を言ってるんですか？ ゲーム万歳ですよ。オール・ハイル・ゲームなのですよ！！》

「はいはい、よしっ、こいつで最後だ！」

時に海賊艦隊へと突っ込む癖のあるラビッツ。運送業とは思えないほどに危険な体験を強制的にさせられていた義明。そのため倒せるほどに相手が弱まると急に強気に出るようになっていたのだった。そして全ての無人機を撃ち落とし終えた、はずだったのだが。

《っ！！ 完全には壊れていなかったとは》

「うわっ！ 食らったか、船の状態は？」

船に軽い衝撃が走る。砲撃を受けた無人機が爆発する最後の瞬間、苦し紛れの射撃を放っていたのだ。それが運悪く被弾してしまった小型船。

《ブースターに被弾したようです。速度低下中……はっ！！ こほん、メインブースターがいかれただと！》

「この状況で余裕あるなお前」

推進装置に被弾している状況で遊ぶラビッツに呆れる義明。その状態のままでは速度が出ず、この戦闘領域から逃れる事すら出来ない程に深刻な状況のはずなのだが、このAIは心配していないようだった。

《まあ嘆いた所で変わりませんよ、それより……これは》

「どうしたラビッツ？」

《この小惑星の影には地球軍の旧型戦艦がありますね。折角なので

色々貰つときましよう」

「戦艦？ どうしてこんな場所に？」

「入ってデータを得ない事にはなんとも言えませんが、約10年前の大戦時の落ち武者だと思われれます。エネルギー等を使用していない事から内部に生き残りは存在しないようですね」

会話をしながら小型船をその戦艦へとつける。そして遠隔操作用の受信機を小型船に取り付け、ラビッツと共に戦艦内へと侵入していく。

10年前の激戦に落ちた艦にしては保存状態が良好なその戦艦。ブリッジへとたどり着いた義明達は、その船を起動し、情報を探っていく。

「予想通りですね、これはあの大战時に落ちた巡洋戦艦です。それにしてはエネルギー残量が多いのが気になりますが」

「使える攻撃手段は主砲と副砲2つのみ、実弾系は不可で他の物も死んでますね。整備する人がいないので仕方がない事です」

「この小惑星の軌道上にあの戦場があったのか、救命ポットは全て使われているな。まあワープ航法とバリアが生きてるっぽいのは儲け物だな」

調べた結果、かなりの掘り出し物だという事が判明した。これを使えば小型船で行くより早く無事にこの戦場を逃げ切れるかもしれない。

「小型船を内部へと積み込み終了。この船の空調系も順調に作動しています。まさかこんな良い状態の艦がそのまま放置されているとは思いませんでした」

「見てください、浅く中層上部までですがこの艦のデータを使って軍内部へと潜り込めますよ」

「……って！？ 何やってんのラビッツ！！ 捕まって処刑されるぞー！！」

《安心してください。書き書きつと、これで良しっ！》
「なにが！？」

勝手に弄くり、そこにある旧式のデータで軍へと侵入しているラビッツ。しかもなにか書き換えていたようだ。

《では移動を開始しましょう。目標はあの戦場です》

「は？ 普通は反対に逃げるだろ？」

《いえ、普通に逃げてもこんな旧式じゃ追いつかれますよ。任せてくださいマスター、もっと面白いイベントを引き起こしますよ》

「いや、イベント的な物は勘弁なのですが……」

生きている人一人のみを内部に納めながら動き始めた古き戦艦。
義明の願いは完璧に無視して戦場へと向かっていくラビッツ。
そして……人々が歓喜する英雄の物語が幕を開ける。

第1話「天外を行く者」（後書き）

ヴィタです、ヴィータではありません。うん、たぶん、そう…かも
…でも発音は………

恋姫キャラが出てきてるっぽいのは次話、名前が出るのはその次か
らです

第2話「水杯」

「艦長！ 進路上に小型の船が！」

「ちっ、運が悪すぎだろそいつ。よりによってこんな時のこんな場所へ来るなんて」

七隻の同型艦をお供に新兵器の稼動実験をするためにと、この片田舎まで来ていた地球連合軍。

しかし、実験場を構築する暇も無いほどに早い段階から敵襲を受けていた。その敵の数五隻。数的有利な戦いではあったのだが、艦の性能値は比べるまでも無く相手側が上回っていた。

全体的に帝国側の性能の方が遥かに高い。連合側が上回れたのは人の数、そして物量だけだった。

「インペラートルの無人機が小型船を襲っているようです！」

「捨て置き、そんな場合じゃない」

「艦長！！」

その判断に反論する副艦長の女性。

現状は分かっているとしても、倫理的な感情が抗議する。

「分かっているだろう副艦長。今の我々にはそんな余裕がない事ぐらい」

「しかし！」

「今、優先されるのはこの艦の情報をあいつらに渡さない事だ。あの小型船には自力で逃げて貰うしかあるまい」

「っ！ 了解しました」

守る為に軍に入ったのに現実には目の前の小型船一つ守れやしない。

痛いほどに手を握り締めながら、それでも軍人として艦長の補佐をすべく指示を出していく副艦長であった。

「無人機が全滅？」

「はい、反応が全てロストしています。場所は小惑星付近です」

「これだからプログラムは……まあいい、戦艦には何も出来ないだろう。そのまま放っておくぞ」

「了解」

小型船をいち早く察知したインペラートル側は無人機での撃墜を命じていた。しかし、その無人機十四機が全滅。それでも小型船のみでは援護も何も出来ないだろうと高を括っていた指揮官。

そして目の前の地球軍の新兵器搭載艦を捕獲するためにと、意識を向けていった。

自艦のレーダーに新たな熱源を感知したのはもう一隻の敵艦を落とした時だった。

《全速前進！！》

「お、おい、もう少し加減を……」

《いやっほう〜》

移動開始と共に巡洋戦艦が唸り声を上げながら突撃していく。造られたのは大戦よりもずっと昔、その旧式のシステムを瞬時に掌握していたラビッツ。

昔、戦闘能力皆無の輸送船でもお構い無しに海賊船へとアタックした事のある彼女の為、無理をしてつけた小型船の砲門。

そんなラビッツがこれほどの戦艦を操れる時を無駄にするはずが

無かったのだ。ラビッツアクションに戦艦を与えてはいけません。そういう格言が義明の頭に浮かんでいたという。

……ただ、ラビッツアクションには急がなければならぬ理由があった。

《目標射程内に捕捉、主砲チャージ40%、整備が出来ていなければこれほど遅くなる訳ですか》

《仕方ありません、副砲の為の角度調整。……完了》

《ラビッツアクション！ その名の通り狙い撃つぜ！！》

「いや、お前の名前に狙い撃つという意味は無い」

義明のつつこみも華麗に無視してインペラートルへと攻撃を仕掛けるラビッツ。しかし旧式の副砲では新型の強固なシールドを貫けるほどの威力は無かった。

相手側も迫り来る熱源に無反応だった訳では無いが、優先順位は射程外の艦より目の前の新兵器搭載艦。しかし予想外に遠距離からの一撃を受けたことにより完全に巡洋戦艦へと意識を向けたインペラートル軍。

「なんだあの艦は？ どこに隠してやがった？」

「熱源が観測されたのは小惑星です。たぶんあそこに放置されていた艦へ小型船の者が乗り移ったでしょう」

「ふん、戦艦を得ていい気になっているようだな。戦闘知らずの素人が」

「敵の砲撃また来ます！」

突如現れた敵の援軍一隻。しかしそんな旧式の戦艦一隻のみで戦況が変わるわけがない、という過去の経験が慢心を生んでいた。

「あの距離でまた当てるか、精密射撃はなかなかだな、しかしその

程度の豆鉄砲では何千発打ち込んでもシールドは貫けないぞ」

笑い声を上げながら敵船を見つめる指揮官。その態度は自分が絶対的強者であり搾取する側であるという事を表していた。

今日が自分の最後となる事など微塵も思わずに……

「味方の援軍か？ それにしてはあんな旧式一隻のみとは」

「あの艦の正体が判明しました、あれは10年前の大戦で消えたはずのエルザ級巡洋戦艦の一つです」

「亡霊が助けに来たとでもいうのか。それでも敗けは変わらないだろう」

敗戦ムードが漂う艦内。オンボロ艦のみでなければ違う結果になったかもしれないが、それは後の祭り。あと出来る事は新兵器を敵に観測させずに手渡さない方法のみ。つまりは自爆だけであった。

そんな中に現れた戦艦。それが彼らを生き長らえさせる物になるうとはこの時誰も予想だにしていなかった。

《くっ、やはり小手先の砲撃ではどうしようもありませんね。計算では主砲の威力でもあのシールドは破れません》

《それに……》

「どうしたんだラビッツ？」

いつもと様子が違うラビッツに心配する義明。長い間コンビを組んでいたからこそ分かる違い。そしてそれはある予感をさせるには十分だったという

《この艦のエネルギーが大量に残っていた理由がつい先程判明しま

した》

《それは、ウイルスの影響です》

「ウイルスって、ラビッツ！ まさか！」

今までに無いほど神妙に話始めたラビッツ。それはプログラムにとって脅威の存在だった。

《完全に動かした時に目覚めさせたようです。私の処理能力の半分以上を使って押さえ込んでありますが、それも余り持ちそうにありません》

《ですからこの戦艦を使ってインペラートル軍を沈め、マスターの逃げ道だけは確保いたします》

「……………」

《くつ、通信システムはボロボロにされましたね。マスター、私からの最後の頼みです》

《どんな事があっても生き抜いてください》

「……………ああ」

余りにも突然すぎる相棒との別れの宣告。それでも泣き顔は見せられない。

俯いていた顔を上げ、確りと前を向いた義明ははっきりとした口調で告げる

「ラビッツ、親友との別れぐらい笑顔で送ってやるぜ」

「また、会おうな」

《はい、マスター 義明》

その言葉を最後に背を向けて小型船へと走っていく義明。その時巡洋戦艦は静かに光り輝きだしていた。

ウイルスに通信システムをやられた事により、断片的な会話が一
オープンチャンネルでその宙域に流れていた。

” ザツ……ザザツ……”

「開放通信？ 雑音が酷いな」

” ……イ……ペラ……トル……沈め……”

” ……は……ザー……よし……あ……き……”

「よしあき、それがあの艦に乗っている人」

「インペラートル軍を沈める！ バカか、あんな旧式ではシールド
を無力化しない限り主砲でも傷一つ付けられないぞ！」

その会話を聞いた地球連合軍は内容に驚きの声をあげる。そして
戦場の中なのに自身の行動を一時中断し、引き寄せられるかのよう
にあの艦へと注目していった。

オープンチャンネルで流れた会話は勿論、インペラートル側にも
聞こえていた。

「艦長、どうします？」

「決まっているだろう、勇気と無謀を履き違えた奴らには、現実の
我らの強さを思い知らせてくれるわ」

義明達の会話内容を一蹴した指揮官。全艦の砲台の向きを巡洋戦
艦へと変え、宇宙の塵にすべく移動していく。

その時。向こうの巡洋戦艦は光に包まれていった。

「敵戦艦、ワープの兆候が見られます」

「ふっ、今更怖気づいて逃げる気か。しかしそんな古臭いシステムでのワープなぞ簡単に解析できるわ」

「解析結果出まし……っ！ 敵艦転移場所はこの艦に重なっています！」

「特攻のつもりか？ 無駄な事だ。全艦へ通達、敵のワープより数瞬早くに相手の出現位置後方へと転移する。一隻たりとも遅れるなよ」

「了解！」

旧式の艦より新型艦の解析処理を含む転移速度の方が格段に早かった。そのためラビッツが特攻を仕掛けても無意味な結果に終わってしまう。

ただその時、電子の海の中に不適に笑う存在がいるという事には誰も気付いていなかった。

《やはりこの宙域でエンカウントする敵など、雑魚でしかなかったようですね》

ラビッツの操る戦艦を包んだ光がより一層の輝きを放ち、そして

……

「転移完了。敵艦……前方へ転移してません！」

「なんだとっ！」

その数瞬前にはインペラートル軍が転移を終了していた。その場所は巡洋戦艦と転移前にいた所の中間少し上。しかも相手の転移の後ろを取ろうとした事から後ろ向きに出現してしまっていたのだ。

ラビッツはその一瞬を見極め転移を強制解除し、今まで溜めていた主砲を敵旗艦目掛けて発射する

「後方に収束する熱量を探知。敵主砲来ます！」

「ばかなっ！？ シ、シールド全開！」

「無理です！ ワープの影響であと5秒は減衰したままです！」

「主砲、発射されました！」

「俺が、この俺がこんなところでっ！！」

生きてきた中で初めてになるのではというほどの大声で叫んだ敵艦長。その声をかき消すほどの光の奔流が戦艦を貫いていった。

ワープの後は少しの間エネルギー系が減衰する。その時を狙って放たれた主砲は、旧式といえども防ぎきれない威力がある。その一撃を食らい宇宙に爆せていった敵艦。

指揮する艦が撃沈された事により、残り四隻の艦の指揮系統もメチャクチャになっていた。

「大佐の船が！！」

「て、撤退！」

「お、応戦しろー」

戦略帝国と謂われているインペラートルには階級が上になるほど戦闘・戦術が強い者という決まりがある。指揮能力が高ければ、戦闘が強ければ少年少女でも高い階級になれるその規則。

大佐の地位はそれなりに強い者しかなれなかった。その大佐の乗っている艦がこんな旧式のオンボロ艦に最初に落とされたという事実はインペラートル側にとってありえない出来事だったのだ、それは外からでも分かるほどの動揺となって艦全体に伝わっていた。

しかしそれ以上に混乱していた人達がいた。インペラートルの軍艦が撃破されたという事態についていけていなかったのは、地球連合軍の艦長達の方だった。

「なにが起きたんだ……」

「っ！ 艦長、今が好機です！」

「あ、ああ、残った全艦で一斉射撃を行え……！」

「りよ、了解……！」

副艦長がそこにいる者達よりも少しだけ早く混乱から立ち直り、補助していく。そして指示通りの攻撃により、敵艦の一つは撃沈した。

その時義之は既に小型船へと乗り込み、今出せる全速力でこの戦場から離れていた。

《ウイルスが他にも侵食していく前に消し去る方法……》

《義明さん、貴方は私にとって最高のパートナーでした。願わくば貴方の道にイベント多きことを》

《さよなら、またいつかお会いしましょう》

電子の海にて呟いたラビッツ。誰にも聞こえていないはずのその言葉が終わる頃、遠く離れていった小型船に乗っている義明は一度、静かに頷いていた。

決して見ない後方の宙域では、先程よりも更に眩い光を発した巡洋戦艦が、インペラートル艦の一つを巻き込んで自爆していった。

「退却、退却……っ！」

たった一隻の介入により覆ってしまった戦場。その余りにも異様な出来事のため、残り二隻となったインペラートル軍は混乱しながら退却していった。

「ワープを強制解除だと、自殺志願者かあいつら」

「そんな、一歩間違えばバラバラになるだけじゃ……」

「なんて奴らだ」

ようやく立ち直り今の戦闘内容を理解する地球軍、辛うじて聞き取れた通信内容からあの戦艦の中に二人はいると推測できていた。しかし今分かったのはそれだけ、件の戦艦は敵を巻き込み自爆をし、その艦から脱出した小型船はダメージの残っている地球軍艦では追いつけないほどに遠くへと移動していたのだった。

「艦長……」

「ああ、実験は中止、これより帰還する。しかしなんだったんだあいつらは」

地球軍ではインペラートルの戦艦を一对一で破壊出来た事例は少ない。特に旧式のオンボロ艦で量産型とはいえ新型艦を撃破した事は異例の出来事だった。

今の記録はあるがそれでも自分の目で見ていない者達には信じられない事だろう。そんな報告をどうすれば良いのかという事を帰り着くまで考えていた艦長。それでも答えは出なかったという。

それから2週間の時が流れる。

推進装置を修理する為に大きく迂回した義明は、今回の収入の半分以上を使って船を直し、戦場から1週間後には元の星へと帰還していた。

そしてそこから1週間の間、仕事を取らず自宅にて寝転んでいた義明。そこへ一つのメールが届いた。

「誰だよ……って！ ラビッツー！！」

気だるそうに携帯を取り、少し操作をして最後に一つのボタンを

押す。するとそこからウィンドウが空中に現れメール内容が展開される。

その差出人の名は馴染みのある名前、消滅したはずのラビッツァクションからのメールだった。

《マスター 義明さん、まずは謝りから入りますすみませんさい。これはあの戦闘時に並列して作ったメールです。少し遠回しに送ったので届くのは1〜2週間後位でしょうか、その時には私は既に居ないでしょう》

《まあ私が居なくなったら部屋でぐうたらしているだろうマスターへ私からのプレゼントがあります》
「ったく、ぐうたらは余計だ」

ラビッツのいつもと同じ口調の文を見て、自然に口元が緩んでいく義明。文字を追いかける速度も自然と速くなっていった

《戦艦のデータを使って軍へと潜り込んだ時、丁度よい人物を発見しましたのでマスターの名前等の上書きしました》

「ははっそうか……はあ!？」

《名前はヨシユア。あの大戦前の時代の中、17歳で少尉になるほどの者です。家族は全員死亡が確認されています》

《そのヨシユアも10年前の戦闘で乗艦が撃沈させられています。地球軍は大戦時にメチャクチャになりましたから、あの時の事を全て把握しようともしてなかったようです。つまり彼は確認されていないけど死亡扱いとされた訳です》

《まあ、宇宙で死亡を確認する方が難しいのですから当然と言えばそうなのですが、という事で名前が似ているマスターなら彼に成りますまし、いえマスターのまままで階級だけ得られるチャンスなのです》
「な、なにを言っているのかな、キミは？」

文章なのでその問いの答えが返ってこない事は分かっていたのだが、つい聞いてしまう義明。それほどに動揺していた。

その後も長々とあるラビッツの暴走、そんなことをするより自己防衛に専念してろ、という感情が沸き起こりかけたその時

《そうそうマスターはこれから軍に出向かなければいけません。でない銃殺モノですよ》

《軍でのやり取りについては既に作成済みですのでそれを参考にしてください。というよりその通りに受け答えないとすぐに嘘だとバれます。そして目出度くジ・エンド〜》

《スリル満載の日々を不肖ながらこのラビッツアクションが贈らせてあげま……》

最後の文章の途中で携帯を投げつけた義明。暫く頂垂れていたが、携帯を拾い上げ、そしてとぼとぼと重い足取りで何処かへと移動していった。

第2話「水杯」（後書き）

AI無双はここまで、これからは主人公君の頑張りにかかっている
色々な宇宙モノが混ぜ合わさる気がする、ような
オリキャラの大半が一発かやられ役になってしまった
次回いよいよ恋姫キャラ登場！ 最初は……………

第3話「軍人・朝倉義明」

地球軍は件の戦場を調べていた。調べると言ってもそれは上層部の指示ではなくその付近に滞在していた者の判断からだ。一艦のみで覆した異例な出来事であつても連合中央の興味はかなり少ない、そんな事があつたかも程度の認識だ。

インペラートル側の方が関心が高いほどだ。それでも一部の者がそれ以上情報を広げさせずに遮断していたのだが……

「ふん」

片田舎の地でその調査がされている頃、インペラートル勢力の戦線近くにある軍支部内にて報告書を読んでいる少女がいた。

いつもなら圧倒的な仕事量をこなしている彼女ではあつたが、その一つの報告は少女の全ての行動を止めてまで見入る価値があつたという。

「華琳さま、どうかされましたか？」

「ええ、ちよつとね」

華琳が読んでいたのはあの時の戦闘の内容だつた。

生き延びた軍艦の記録によつて齎された情報、普通ではやれない事を成し遂げた者がいるという内容に彼女の眼は少しだけ鋭い光を放っていた。

「よつやく活気づく季節が巡ってきたというわけね」

「秋蘭、向こうに送った草花をこの者に添えられるように手配しなさい。上に気付けられないように、それと……」

「御意」

部下である秋蘭に命じ、個室の扉が完全に閉まるまで見送っていた目をもう一度報告書へと落とす華琳。

「私が刈り取るまで精々潰されないように、ね」

その眼に映っていたのはもうすぐ起きる未来の光景、なのかもしれない。

地球勢力側では一人の少女が落胆した面持ちで街を歩いていた。そして行き着いた所は地球連合宇宙支部にある受付だった。

そこは一般にも開放されており、随時入隊希望者を募っている。ホール内には見学者の姿もちらほら見える。

そんな周りの状況を無視して受付のカウンター内に侵入していく少女。

「アネットさーん」

「ち、ちよつとなに入ってきてるのよ劉備!？」

ホール内に突然響いた声、そのやり取りで周りの視線を集めてはいたが、それでも構わず劉備は抱きついていく。

「聞いてくださいよ、私また異動ですよお」

「あーはいはい、で今度はどこに行く事になったの?」

「白れ……伯珪ちゃんの所」

耳元で騒ぐ劉備を引っぺがし、かつたるそうにしながらも話を聞く事にした受付嬢。中々に手馴れていた。

劉備は件の実験艦の副艦長をしていたのだ。階級は大尉。新兵器実験を失敗した為に更に遠くの地方へと飛ばされる所だった。

その責は当然艦長も問われてはいたが、彼は二ヶ月の給料10%カットのみで済んでいた。

「伯珪……ああ、公孫贄の所ね、うわっ、あんたの失敗したっていう実験場並みにど田舎な左遷区域じゃない」

「む、それは伯珪ちゃんに失礼です、あれでも頑張っているんですよ」

「いや、あれでもって……」

劉備のみ扱いの酷い状況なのには訳があった、それは上司である大将の一人が持っていた「戦場に立つのは男の役目だ」という理念からだった。

10年前までは男性の数が多かったものの大戦にてその数を大幅に減らし、女性兵率の割合が急激に増えていった事もその大将には頂けない状況だったのだ。

そのため女性である劉備、いや配下の女性兵は特に報われる事は少なかった。白蓮もその一人。

「あ、あのう」

「はあ、とりあえずあんたの夢からはまた遠ざかったって事ね」

「でもでも、もう一つ受けた任務を遂行すれば道は見えてきますよ！」

そんな二人に対しておずおずと声をかける者がいた、のだが盛り上がりだした少女達の会話を遮る事は出来なかった。

「す、すみません」

「あの時の小型船で脱出していた人を探すんですけど、その人は名

前だけしか分からないんですよ。ここ10数年間の軍のデータベースに載っているだけで七人は同じ名前の人が居ました」

「けどその全ての人が戦場で亡くなったと記録されているんです」

「それって上から体良く……というかあんだ急に元気になったわね」

ホール内で二人の女性がワイワイと盛り上がり、その前で無視されている青年という構図は日常には無かった風景、そのため周囲の視線は全て彼らに注がれていた。

あの青年はよくあんな中に突っ込んで行けたもんだよ、と遠くで清掃していたおばちゃんがホロリと涙していたらしい。

「……やっぱり帰ろうか、いやいや銃殺は嫌だし、くっ、ラビッツめここまで考えていたとは《私の作ったイベントからは逃げられない》とかなんとか昔言っていたのをすっかり忘れていたぜ」

軍入隊を回避するためにこの数日間ほどかなりの努力をしていた義明、しかし無駄に高性能だったラビッツアクション最後のイベントは義明の逃げ道を完璧に塞いでいた。

遂に観念し入隊を決めてはいたが、大きな所はやはり怖かったので当たり障りがなさそうな小さな支部を選んで訪ねていた。

そこで何度か深呼吸をし、意を決して受付の所まで踏み込んだ義明は今、自分の事に気付いてもらえないという思いもしない状況となっていたのだ。

「軍に入ってから何かしらの理由で除隊するのが一番だと思うけど」

相手にされていない状況と来たくはなかった軍という場所が相まって義明の帰りたいたいという思いは強くなっていった。

「それでこの広い宇宙の中からどうやってその人を探し出す気なの

「？」

「そうなんですよお、だからアネットさん助けてくださいー」

「だから、抱きつくな！！」

「……っそうだ！ 名前を変えれば良かったんじゃないか！ ははっそうだよな、うん、ではお騒がせしました」

三者三様なその場を義明は、自分の頭の上に電球が見えるほどの名案を思いつきそのまま出口へクルツと華麗にターンしようとした時に、受付嬢のアネットが抱きついてきた劉備を投げ飛ばしていた。

「いたあく、……あ」

「……ど、ども」

「どうも。こちらへは入隊希望ですか？」

折角の逃げるチャンスだったのに”ごんっ”という音に反応し、またカウンター内をのぞいてしまった義明と、一度話が区切れた事で周りが見えるようになった劉備の間に何とも言えない気まずい空気が漂う。

その二人とは別に微笑み、マニュアル通りの受け答えをするアネット。流石はプロの受付だ。

「あ、その……えーと……」

「入隊希望でしたら、この用紙の記入してください」

「いや、なんていうか、復帰希望？ みたいな」

「でしたらここに名前を書いて下さい。あと証明の提示をお願いします」

受付嬢の言うとおりに証明カードを渡す。それを読み取ると目の前のモニターに情報が現れた。

「浅倉義明さんですね。ちょっと待つてください……軍歴では死亡とされています。この場合は……」

「浅倉義明……義明……よし……あき……よしあきさん!!」
「は、はい!!」

カウンター内部に居た劉備にもその情報は見えていた、そしてその名前を大きな声で叫び義明を怯ます。

「あの、3週間ぐらい前に小型船で戦場へと来ませんでしたか？」

「……もしかしてあの何も無い宙域でドンパチしていた人？」

「そうです！ やっぱりです！ アネットさん、やりました!!」

喜びの声をあげている劉備の隣で完全無視を決め込んだアネットがマニュアルに従い指紋照合機を取り出ししていた。

「では、これに手を置いてください」

「はい、あ、あの、そちらの方はどうしたんですか？」

「気にしないで下さい、これはいない者だと思って結構ですので
「ひどーい!!」

じゃれ合う二人に付いていけない義明、そうこうしている間に本人証明が終了していた。

ラビッツが改変していた情報によりすんなりと通った証明。ラビッツアクションを作った人はまず間違いなく変態だとその時の義明は思っていた。

「はい、もういいですよ、義明さん本人に間違いなし、これは上に報告した方がよさそうね」

「ねえ、劉大尉、この場合ってどうなるの？」

階級的にはアネットより劉備の方が高い、上司やうるさい同僚が居た時は弁えるが周りを気にしない時は大抵友として接している二人。

「戦死扱いの人が生きていたっていう事例は幾つかあります。確かに軍に戻れた時は二階級特進のまま現役復帰したはずですよ」

「それならこの人は大尉になるの？」

「うーん、そういう事は伯珪ちゃんに任せようと思う」

「……あんたも大概あれだよな」

「なにかな？」

「なんでも」

ややこしい事は親友の白蓮に全任せをしようとしている劉備。

軽く迫力が出ている笑顔で笑い合う二人を見ながら、帰るタイミングを逃した義明はただただ突っ立っていた。

「じゃあ義明さん、行きましょう！」

「……へ？ えーと、どこに？」

「それは着いてからのお楽しみです」

「え？ え？」

受付のカウンターから飛び出し、義明の腕を引つ張って出発した劉備。ここへ来た時とは打って変って晴れやかな顔だった。

「まったく、じゃじゃ馬なんだから」

台風が過ぎ去った受付の中でアネットは呟いた言葉とは裏腹に優しく笑っていた

「とりあえず仕事、仕事っ」と

そうしてまた、いつも通りの静かなホールへと戻っていった。

劉備に連れられた義明は、宇宙船で公孫贇の所へと向かっていた。幾つか賑わいを見せる星はあるが、少しでも遠出すると交流がほとんどないほどに静まり返っている航路が多数見受けられる公孫領。連合の首都星はもちろん、他勢力とも離れている場所の為、戦場となる事は余りない宙域。あるとすれば海賊やならず者達の討伐等だけであった。

「桃香！ ひっさしぶりだなー！」

「白蓮ちゃん、きゃー！ 久しぶりだねー」

今の政治はほとんど軍が担っていた、というより軍が政府に成り代わっていたと言っても良かった。広い宇宙、そして敵対する者が現れた為に色々ある工程を端折っていった結果が今の地球連合の姿だった。

「ああ、そっちが報告にあったという」

「そうだよ！ 義明さん、この人は公孫准将。この星域では一番偉い軍人さんだよ」

「よ、よろしくお願いします」

「そんなに硬くならなくていい、噂とは大分違うようだな」

制服を着た軍人が多数いる港へと降りた二人、その中を大尉という階級と白蓮の親友という事でスムーズに会う事が出来ていた桃香達と、その対面を萎縮しながら眺めていた義明。ボロを出せない義明にとって初めてのお偉いさんとの対面はとんでもなく緊張したモノになっていた。

合わせて、ここまでの道中で通り過ぎていたいかにもな軍人を見るたびにその雰囲気と騙しているという事実が義明をどんどん小さなモノにしていった。

それは完璧なる普通の人と称賛される白蓮にして、その場に居る事に気付くまでに少しの時間を有するほどだった。

「こっちで処理しといたから、今から朝倉大尉として頑張ってもらおう事になったよ」

「まったく、桃香はこっちへ来て早々に面倒事を押し付けてくれて」

軽く桃香を睨みつけながら言う白蓮。それを視線を泳がせて聞かなかった事にしようとしている桃香。

「10年近く療養期間が挟まったから分からない事だらけだと思っ、この10年でかなり様変わりしたはずだから。それで分からない事があつたら桃香、あ、いや劉備に聞いてくれ。これでも同じ階級なんだから」

「あの、名前が二つあるんですか？」

「ああそっか、私たちは真名という親しい者のみに許す神聖な名前があるんだ。人が宇宙に出て数千年経った今、所々にあつたり無かつたりする風習だけど、間違つて呼んでしまつと殺される事もあるから気を付けてくれよ」

「あ、は、はい」

真名という風習を聞いて更にびびる義明。ちなみに彼はラビッツの手により証明カードに、決戦の際に深手を負い運よく辿り着いた片田舎で10年にも及ぶ再生治療を受けていたと記載させられていた。

片田舎では古い装置、もしくは装置や治療方法自体が無い場所もあり10年という期間はありえる事だった為、だれもそのことに対

しては疑問視していない。

「とりあえずはそういうことで、今日はもう休んでいいぞ。桃香、空いている部屋へ適当に案内しといてくれ」

「分かったよ、じゃあお引越しだね」

「明日からは頑張ってくれよ、特に桃香は。盧植教官に囑望されていたぐらいなのに茨の道を進んで……」

「あはははは、大丈夫だよ、これからは平気だよ」

むんつと握った手を小さく内側へ引き寄せるポーズを取った桃香。数年単位で会った親友が相変わらずな所を見て白蓮は笑う。

白蓮と別れ桃香達は与えられた個室へと歩いていった。その少し後、この星に一隻の戦艦が到着した。

第3話「軍人・朝倉義明」（後書き）

軍人となってしまうた主人公くん。ここから怒涛のイベントの嵐が……。

無事除隊する事はできるのか。

まあそれは置いといて、マイロードに上を作るだけで何か策謀がありそうな予感に。

すんなり収まっている所がまたこわひ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2858n/>

星燐のヴィタ

2010年12月9日13時41分発行